

〔勸修寺縁起〕閑院贈太政大臣冬嗣のおとゞ申は、大織冠六代の御すゑ、大納言眞楯卿の御孫、右大臣内麻呂の六男にてぞおはしける、その冬嗣の御子に、内舍人良門と申人おはしけり、昔はやむごとなき人も、うひづかさには、内舍人なごにも成給けるなるべし、良門の御子に高藤と申おはしけり、わかきいとけなくおはしける、○中 弱冠におはしけるころ、ちかくつかうまつるをのこどもいざなひて、たかゞりにいで給ぬ、みなみ山科のほとりに狩ゆき給に、空のけしきかさくも、風吹雨なごふりければ、しばしは時雨の山めぐりにやと思に、神さへおどろくしく、いなびかりのかげむくつけかりければ、○中 にし山ぎはに人里のみゆるを心ざして、むまにむちうち給ふ、おくゆかしきひがきに萱にてふける門したる家なん有けるに、馬に乗ながらうちいれて、三間ばかりの廊のありけるにおりぬ給ぬ、○中 あるといとおどろきて、いそぎ内に歸入て、火ともしとり去つらふ、○中 日もいたう暮にければ、心ならずよりふしたまひぬ、おくざまなる障子をわけて、とし十四五ばかりにやとみえたる女の、去をん色のふたつきぬに、こきはかまきたるがあふぎさしかくして、さかづきなごとりてさし置つゝ、うちそばみてゐたれば、その日のとさだかならねども、かゝる所にあるべしともみえず、いとなさけありてぞおぼされける、○中 なが月のころなりければ、すがのねのながきやすが、草の枕におく露のまもまごろみたまはず、行すゑかけてちぎりおきて、夜もわけゆけば、かくてあるべきならねば、はき給へる大刀を、くちせぬかたみにとゞめおきてたち出給ぬ、○中 鴈の翅だにもかよはず、露のたまづさのたよりもなくて、年月をぞおくり給ける、○中 かやうにてすぐる程に、むなしく歳のむとせにもなりけり、○中 ひとせ御どもなりし馬飼のをのこ、○中 ちかくめしよせて、ありしかりばのあまやどりはおぼゆるやとのたまふに、わすれ侍らぬよし申に、いどうれしくて、御どもの人なごおほからぬさまにて、○中 おはしつきぬ、あるじの男さまをひして、いそぎをゐりたれば、あるじ、女君は